

研究資料

18世紀後半の江戸と仙台における相撲文化の相互作用に関する一考察 —谷風を中心とする仙台藩の力士の位相に着目して—

藪 耕太郎

Kotaro Yabu: Cultural Interactions of Sumo between Edo and Sendai in the latter half of the 18th Century :Analysis of the phase of Tanikaze and some sumo wrestlers from Sendai clan. Bulletin of Sendai University, 45 (1) : 1-10, September , 2013.

Abstract: This Study is based on the open lecture “Mori no Miyako no Sports Bunka-si (Sport History of Sendai), and is corrected some new findings. In the lecture, I treated about the Tanikaze (The sumo-wrestler who was from the Sendai clan) and sumo, and this paper, is to inquire the meanings of the cultural transmission and interactions by biewing through the geopolitical relationship between Edo and Sendai, still more.

The conclusions of this paper are shown as followings.

Firstly, sumo was receipted in Sendai clan, positively. But, this was widely adopted and altered by local level.

Secondly, It was confirmed that the central culture had a influence on the primitive and native folk religion, which was got Tanikaze as a theme.

Thirdly, Tanikaze became a symbol of sumo, through reasoning from townsman of Edo to Tanikaze.

Fourthly, Sumo functioned as an unofficial meeting place, and process of politicization, sumo-wresler and referee who was from Sendai clan played some role.

Key words: cultural transmission, kanjin-sumo, central-local relationship

キーワード: 文化の移動, 勸進相撲, 中央—地方の関係性

I. はじめに

本資料は、学都仙台コンソーシアム主催の「講座仙台学 2012—仙台の歴史と文化—」において筆者が担当した「杜の都のスポーツ文化史」¹⁾（於：仙台市戦災復興記念館）の講座をもとに、その内容の整理・紹介を踏まえつつ、今後の研究課題の精緻化を意図して作成したものである。

同コンソーシアムは、本学を含む宮城県下の主要高等教育機関および行政・企業・仙台市民の協同に基づく知の連携を図る目的で設立されており、筆者の担当講座も本学による地域への

知的貢献の取り組みの一環といえる。従って、こうした学外活動の報告を通じて本学内への内容の還元と共有を図るうえでも、まずは同講座におけるテーマの概要や意味について、従前における同種の展示や講演との比較を交えて検討したい。

一方で執筆にあたっては、市民向け開放講座という性格上、講演に際してはやや平板化して扱わざるを得なかった内容を、体育・スポーツ史の文脈に引き付けて論じることで、本論をひろく同学問領域の俎上に載せることを目指した。とりわけ、文化の移動を通じた相撲と社会の相互作用という観点に着目することで、高津

勝が指摘するように「[相撲史を：引用者] 個別種目史の枠組みを超え、相撲という競技を社会構造や文化とかかわらせて考察」²⁾ することを試みた。

なお、本稿では下記の②をもとにしながら、講座で扱った谷風の事例に加えて、当時の相撲と仙台藩との関係までを射程とした。加えて、後述の理由から①および③は本稿では割愛する。以上の前置きを踏まえて、開講に際して設定した問題の所在を論じたい。

同講座では、第1に「仙台のスポーツ文化史を総花的に概観」しつつ、第2に仙台における「みえる／みえない歴史を紹介する」ことを目的に、第1の観点から①「史跡にみる仙台のスポーツ文化」を扱ったうえで、第2の観点から②「相撲文化と谷風」、③「高専柔道と仙台二高」を講じた。この2つの観点の差異は、文化を定点観測的にうかがうか、それとも文化の移動／還流を重視するか、という眼差しの相違に基づく。講座では主に後者の観点を強調したが、それは従前において仙台で開講された同種の展示や講演における、ある種の傾向を配慮してのものである。

近年における主たる展示・講演の記録を列記すれば、「学都仙台 明治の学生群像—東北大学がなかった頃—」および「第二高等学校創立120周年記念写真・史料展—旧制二高の軌跡いまに—」³⁾ (2008) では学生スポーツと旧制第二高等学校の校風についての展示、「スポーツの史跡を訪ねる」⁴⁾ (2009) では前本学教授の中房敏朗氏による仙台市内のスポーツ文化史跡についての講演、「せんだい学生スポーツの黎明」⁵⁾ (2010) では仙台における学生文化とスポーツとの関係についての展示、などがある。なお、2010年の展示に際しては「せんだい学生スポーツの源流」の公開講座が開催されており、野球と漕艇の2種目の仙台における歴史的展開過程が紹介された。これらのタイトルからは、主催者・講演者と聴講者・来場者の双方にとって、仙台におけるスポーツ文化の歴史が総じて関心の高いトピックであることが示唆されよう。

ここで、あえて概括的に各企画に共通する基底を述べれば、第1に東北圏最大の地方都市た

る仙台という地政学的特性への配慮、第2に明治期以降における近代日本社会と学校／学生文化への目配り、が見出せる。さらに、こうした共通性の背後には、単に主催側が仙台という地域の固有性に着目したイベントを企図しているという理由のみならず、欧米スポーツの日本における本格的な受容の嚆矢が、明治期のエリート教育機関や学生にあったという歴史的経緯があるろう。従って各企画においては、おしなべて対象が近代以降における仙台のスポーツに限定される傾向にあるようだ。

翻って筆者が担当した講座においては、これら従前の企画が示す知見を念頭に置きつつも、仙台特有の風土や固有性から同地の文化を追究するだけではなく、仙台という地方都市と中央を結ぶ文化の移動／還流に伴う諸作用を明徴にしたいと考えた。つまり、文化を境界が画定されたローカルな場での構成として定位するというよりは、むしろ文化の「転地という実践は、たんなる場所の移動や拡張ではなく、むしろ多様な文化的な意味を構成するもの」⁶⁾ (傍点部は原文ママ) とする、文化人類学者のジェームズ・クリフォードの論を援用しつつ、中央と地方を巡る文化の還流と相互作用を重視した。

この点で、この文脈における中央とは江戸／東京を指すが、その中央とは、必ずしも自律的・普遍的な意味での中心を意味しない。少なくとも同講座で扱った事例に臨む限り、文化を巡る地政学的なヘゲモニーは常にその外部と内部から揺さぶられており、あくまで文化のターミナルや集積所としての機能としての中心＝中央に過ぎないことを確認しておきたい。

ところで講座では、谷風を「みえる歴史」の代表事例として扱ったが、その根拠は次の2点の理由に基づく。

第1に、次章以降で論じるように、谷風は実質上の初代横綱であり、またその成績、人格、技量などに傑出した人物として、相撲史上でも極めて有名な力士である。この点で、相撲史関連の文献でその名前が記載されないことはまず無いと述べて良いだろう。のみならず、仙台の文化史を総覧する文献の類においても、谷風の名前は郷土の英雄として記されている。従って、

相撲史と仙台史の双方において、総じて谷風は可視化されている。

第2に、谷風の碑が勾当台公園に設置されるほか、霞目駐屯地脇の谷風の墓所や、陸奥國分寺の牛石／踏石、東漸寺の谷風碑といった史跡が現在も保存されており、また若林区霞目字谷風のように地名の由来となることや、あるいは「谷風通り」（仙台駅西口駅前アーケード街に並行する通り）のような愛称も見出せる。こうした現在にまで至る谷風とローカリティとの接続は、谷風が好角家のみならず多くの仙台市民にとって一定の知名度を得ていることを間接的に示す証左といえよう。

しかし、講座で筆者が強調したのは、谷風が地政学的に固着された人物として「みえる」がゆえに生じる、ある種の歴史的盲点についてである。詳細は後述するが、仙台—江戸、怪力—相撲、素朴—洗練、卑賤—高貴、宗教—世俗、民衆文化—政争の場、といった諸関係の狭間に位置する谷風の意味や役割は、容易に一元的に定位できない。というよりはむしろ、谷風もまた「共通の前提とされていたローカル主義を混乱させるような、横断と相互作用の実践として現れた」⁷⁾ものであり、その定位できない浮動性そのものが、谷風という移動する身体を構成する要素といえる。

この文化の移動や還流が織りなす相互作用は、文化の土着性を強調する本質主義的な歴史解釈をも揺さぶる。逆にいえば、「みえる歴史」とは、「さまざまな接触を通じて維持され、人びとと事物のたえまない移動を流用し、規律化する」⁸⁾ことで規定された、つまり規律化に至る過程で生じた様々な文化作用を捨象し、規律化の結果から定位された歴史に他ならないだろう。

以上の前提をもとに、講座では、郷土の英雄としての谷風について講じるというよりはむしろ、相撲を介して形成された中央—地方の相互作用のひとつの構成として谷風を扱うことで、従前の谷風像に若干の補足を図った。それに加えて本稿では、相撲の文化的特性や、谷風を排出した仙台藩と相撲の関係についても併せて論じてみたい。

その際の手順は次の通りである。第1に、先行研究の知見を踏まえて江戸期における勧進相撲の成立展開過程とその特徴を俯瞰し、全体像を把握する。第2に、仙台における相撲文化のありようを論じ、また地域の習俗や信仰と相撲の結節について、谷風を介して検討する。第3に、江戸における相撲文化の位相を江戸町民から谷風への意味付与から考察し、加えて幕藩体制において相撲が果たした役割について、仙台藩および谷風を含む仙台出身の力士の動向から論じる。

なお、本資料で記述した相撲史の理解の全般を通じては、新田一郎および高津勝の見解から多大な示唆を得た。新田は『相撲の歴史』⁹⁾を通じて、管見の限りで最も詳細に相撲の通史を描いており、その歴史解釈を筆者も概ね踏襲している。高津は複数の論文において、相撲を介した中央—地方の文化移動のダイナミクスを、民衆史や文化人類学の知見を援用しながら精緻に検討しており、その観点は筆者も多く共有するものである¹⁰⁾。また、江戸期における仙台の相撲については『宮城縣史18』¹¹⁾中に詳細な論考があり、本稿でも同書から多くの知見を得た。

最後に、先述の①については、先に紹介した中房による講演の内容を踏襲しており、本資料で新たに追記する必要は無いと判断したため、本節以降の記述からは割愛した。また谷風と高専柔道の事例は、仙台と江戸／東京を結ぶという点で眼差しの共通性を持ち、加えてある種の対蹠性を有するが、一方で時系列的には殆ど接続しておらず、担い手その他を含めてそれぞれが独立した文化事象である。従って高専柔道については他日に稿を改めて論じたい。

II. 勧進相撲の成立過程

1. 勧進相撲の成立と展開

勧進相撲は、競技的性格の希薄な相撲神事ではなく、祭礼に参加する人々が提供／享受する娯楽としての奉納相撲（寺社祭礼相撲）と密接に結び付いた文化であり、その意味で形式化さ

れた祭礼や宗教、あるいは武士文化の系譜のみでは論じることができない文化である¹²⁾。この点について、その歴史過程から紐解いてみたい。

まず、平安期の宮廷で8世紀から開始された相撲節会は、一方では農耕儀礼と、他方で服属儀礼と接続しながら、承安3(1174)年まで続けられた。この点で相撲は、諸国の相撲文化を統合しつつ、諸国の強者を天皇の元に召集することも目的のひとつにあり、節会で優れた膂力を発揮した者は、近衛兵や衛士に任命された。

やがて相撲節会は、服属儀礼からより娯楽的な芸芸催事へと変容し、最後は戦乱と社会変動に伴う運営体制の破綻によって終焉を迎えた。かつて相撲節会に参加していた相撲人は、鎌倉幕府に御家人として従うか、もしくは相撲の専門職人となり、集団を組んで各地の寺社で相撲を演じることで生計を得るようになった。こうして、後者を主たる担い手として近世に成立した職業相撲、寺社祭礼相撲こそが、15世紀前半に始まる勸進相撲の嚆矢である。

一方で村落をみれば、共同体の成員を主たる担い手として相撲が行われていた。それは、農事と結びついた祭礼であると同時に、厳しい日常からの開放を示す娯楽でもあった。こうした奉納相撲は、村落の農事歴や生活歴の中に位置づけられることで、共同体の結合を可視的に示す機能を獲得しながら、共同体の成員を担い手に存続したといえる。また、群発的に集った群衆が興じた辻相撲も、手近な賭博として人気を博した。

ところで勸進とは、寺社や公共財などの建・建設・修復の資金調達を目的とする集金活動だが、多くの場合それに先立つ興行が催され、木戸銭の徴収を図ることで資金調達の促進が図られた。この点で奉納という性格を持つ相撲は、こうした興行に最適な呼び物のひとつだったと考えられる。一方で相撲は、広く民衆を射程に入れた新規マーケットを開拓するために、また見物料を払うに値する芸をみせるために、興行の場を通じて高度専門化していった。また、同時期における芸能の「座」の成立は、職業芸能人としての相撲の専門職化を促進した。相撲渡世集団の誕生である。

江戸期においては、勸進を名目上の口実として興行を行う相撲興行が盛んになった。その隆盛ぶりは、17世紀半ば、慶安から享保の時期における幕府による辻相撲や草相撲の度重なる禁止令や、あるいはときに勸進相撲であっても禁止令が発布された(慶安元/1648年・寛文元/1661年)、という史実が逆説的に示していよう。最終的に幕府は、禁止令という強硬策では無く、特定の相撲年寄・頭取に特権的・独占的に興行権を与える、つまり後述する特定の集団への職能的特権の付与と引き換えに、相撲浪人の不穏な活動や民衆の過剰な相撲熱の鎮静化を図った。この点は次節で詳述する。

加えて中世から近世における、武家による強い相撲取の召し抱えは、各藩による相撲組や相撲衆の組織化の進展に繋がり、諸国に相撲の高度専門集団が形成された。元禄期(1688-1704)以降になると、各藩における財政がおしなべて逼迫し、その影響で削減された力士の封禄を興行の給金で補填しようとした結果、抱え力士が都市部の相撲に集結するようになる。この過程で江戸、大阪、京都の三都での勸進相撲興行が地方の相撲に抜きん出た地位を獲得し、文化的中心が上方から江戸に移行する江戸中期以降には、江戸相撲の勢力が大阪・京都を上回るようになった。

2. 吉田司家と江戸相撲

相撲故実と呼ばれる、相撲文化および相撲渡世集団の由来や縁起、権威の正統/正当性を示す規範は、幕府による措置に対抗する際に大きな役割を担った¹³⁾。そしてこの故実を頼りに江戸相撲を介して大きな権勢を得たのが、神亀3(726)年に聖武天皇に相撲の技法、礼法その他の制定を奏上した志賀清林の正統な系譜を汲むと称する、吉田司家である。吉田家は京都二条家に奉公した後、熊本細川氏に召抱えられたという。

しかし、多くの相撲史家が論じるように、吉田家による相撲故実を含めた伝承の類に記された歴史的由緒には少なからず虚偽が認められる¹⁴⁾。もとより、志賀清林の实在自体が怪しまれており、土俵入りや礼式の作法、そして後述す

る横綱位の正当性についてもその殆どがフィクションといえる。この点で、中世から近世にかけて存在した数多の行司家による覇権争いにおいて、その一派である吉田家は江戸相撲に接近することで他派を凌駕することを画策し、後述する様々な制度や仕組みを整え、またその権威的裏付けとして歴史的連続性を創出したものと考えて良いだろう。

寛永2(1749)年、吉田司家の吉田善左衛門(16世追風)に初代谷風の推薦で、行事の木村庄之助・式守五太夫が入門し、相撲故実が伝授された。追風とは、後鳥羽上皇が相撲に関する全権を吉田司家に委ねた際に贈られた号とされるが、この点も真偽のほどは確かでは無い。また、木村らに丸山が同行して横綱位を得たという逸話もあるが、それも史実をみれば、谷風に第4代の横綱免許を与える際に、その権威を歴史的に遡って裏付けるために捏造されたものと思われる。なお、初代横綱とされる明石志賀之助については、その实在自体に怪しむべき点があるが、本稿では吉田司家の虚偽を暴くことではなく、同家が江戸相撲で権勢を得る過程に着目したい。

木村らを通じて中央と接続する回路を得た吉田司家は、寛政元(1790)年に谷風・小野川に横綱免許を授与し、また寺社奉行に本家の由緒を示した。そして寛政3(1791)年に催された初めての上覧相撲において、徳川家斉の眼前でその一切の取り仕切りおよび行司を務め、結果として吉田司家は幕府のお墨付きを得ることになる。以後明治・大正を経て、昭和後期まで同家は斯界に大きな影響力を行使し続けた。

こうして公的な権威を有した江戸相撲は、次のような特徴を得た¹⁵⁾。第1に、幕府による特定集団への職能的特権の付与により、民衆や在郷の社会集団が自由に相撲興行を打つ権利は剥奪された。第2に、地方の相撲集団は中央の権威を仰ぎ、その様式や作法を受容することで自らの権威の正当化を図るようになり、地方の相撲は中央に統制された。第3に、相撲界の組織化の進展は、親方の権威の向上と、所属力士の親方への従属を促した。第4に、専門化の促進や力士の三都への集中を通じて、相撲技術が高

度化し、また専門芸能としての相撲を娯楽として楽しむなかで、相撲独特の文化や風俗が誕生した。第5に、三都、とりわけ江戸を頂点とする相撲の中央—地方のネットワークを介して、人的な需給関係が促進され、地方在住の力士にも活力を与えた。第6に、相撲の正当化と権威付けがなされる一方で、江戸相撲は社会的差別に加担した。この点は後段で改めて検討する。

Ⅲ. 仙台藩の相撲文化と谷風

1. 仙台藩と勸進相撲

仙台藩は、東北圏のみならず全国屈指の相撲藩としてその名を馳せた¹⁶⁾。それは江戸期を通じて3名の横綱を含む多数の有力力士を排出し、また三都いずれの興行においても仙台出身力士が上位の番付にあったことから明らかである。また、特に相撲を愛好したのは伊達家4代藩主綱村から8代斉村の治世(17世紀中期—18世紀末)であり、それは勸進相撲の中興—全盛時期と重なる。

ここで歴代藩主と相撲との結びつきを簡単に述べれば、第5代吉村(家督:貞享3/1686年—寛保3/1743)においては、丸山権太左衛門を始めとする多数の力士を三都に送った。6代宗村(家督:寛保3/1743—宝暦6/1756年)もまた吉村と同様に多くの力士を送り出し、また領内の巡察や狩猟に際しては、村落の地相撲を奨励した。7代重村(家督:宝暦6/1756年—寛政2/1790年)は、それまで秀ノ山を名乗っていた谷風に自ら伊達ヶ関のしこ名を与え、また後述する上覧相撲においては谷風に化粧回しを贈り、上屋敷にも招いている。これは、仙台出身の力士中においても谷風が仙台藩と特別の関係を切り結んでいたことを意味しよう。

谷風への寵愛は8代斉村(家督:寛政2/1790年—寛政8/1796年)も同様であり、また重村の代からは、仙台城二の丸と小泉御殿において相撲大会が隔年ごとに開催された。しかし、綱村の浪費や重村の失政に加えて、宝暦・天明の大飢饉による米市場の破綻があり、9代周宗以降の相撲は衰微していった。なお、これ

だけの相撲藩であるにも関わらず、仙台藩は公式には抱え力士を擁さず、有力力士は白石片倉家の預かりだった。その内容と意味については後段で論じる。

ところで仙台で勸進興行が行われる際には、荒町毘沙門堂、榴ヶ岡釈迦堂／天満宮、原町観音堂、宮町東照宮の境内での開催が規定されていた。それは、勸進という性格に基づく理由だけでない。これら5ヶ所の寺社のうち、城下からやや南下した奥州街道の沿道にあたる荒町毘沙門堂での興行が多かったように、大概において相撲は交通の要所で行われた。即ちこうした場合は、単なる祭祀施設ではなく、人や物資、情報が集中する地域の拠点であり、中央と地方の文化的ジャンクションだったといえる。在郷力士や力自慢が地方での相撲興行を介して中央に上ったことは、こうした場の特性をよく示している。後述の谷風と関ノ戸の関係は、地方出身の力士が地元で凱旋することで中央の文化が地方に持ち込まれ、また地方から中央へと至る回路が形成されたことを表す一例である。

また仙台での取組は、勸進方（座元）と寄方の対抗試合という形態を採り、勸進方は東方とされ、幕下を含めて殆どを仙台出身の力士で揃えた。この点で、仙台での興行に際しては、俗に仙台番付と称する江戸での番付とは異なる序列に基づく編成が組まれており、また興行の初日において告知のために市中を回る触れ太鼓は、江戸相撲の関係者ではなく、地元の人々が積極的に担い手となった。その意味で、仙台もまた江戸相撲を自発的に受容したが、一方でその受容は改変の余地の無い形式的なものではなく、ローカルな文脈に応じて改変する余地が残されていた、といえよう。

2. 怪力と相撲の結節

谷風梶之助（寛延3/1750年—寛政7/1795年）は、本名を金子与四郎といい、宮城郡霞目村に名字帯刀を許された豪農の長男として生まれた¹⁷⁾。家系としては、現在の宮城県南部に勢力を誇った国分氏の流れを汲む。幼い頃から怪力で知られていた谷風は、同郷の力士で仙台巡業中だった関ノ戸億右衛門（後の2代伊勢ノ海）に

見出され、白石城下にある力士の養成所で稽古を積んだ後に上京した。その後、秀の山のしこ名で明和5（1768）年に力士となり、翌年に伊達ヶ関森右エ門の名を5代重村より与えられ、初土俵を踏んでいる。なお、翌場所より達ヶ関と改名した。公称では身長6尺2寸5分（約190cm）、43貫（約160kg）の大型力士だったようだ。

ところで、牛石／踏石がある陸奥國分寺内の白山神社は、同寺の地主権現であり、国分氏の氏神と言いつたえられる。祭日には国分侍の子孫によって祭礼が執行され、たとえば流鏝馬の際に金子氏は矢拾いの役割を担った。同様の事例は、刈田郡宮村に生まれた初代谷風が、白鳥大明神（刈田嶺神社）にあやかり、明神に夢を託してしこ名を明神林とした、といった逸話などにもみられるが¹⁸⁾、いずれにしても牛石や踏石のような伝承は無分別に生じるわけではなく、由縁や地縁、土俗と結合して発生している。

牛石は、谷風の母が子授祈願のため薬師堂に連夜参詣していたところ、薬師如来が牛型の石に化けて現れ、その石を跨いだ母に谷風が宿った、あるいは、幼児期の谷風が参道を塞ぐ邪魔な牛石を取り除いた、と言いつたられている。

次に踏石は、谷風が郷土に凱旋した際に、往時を偲んで牛石の傍らにあった石を踏んだところ、その足跡の形に石が窪んだ、という伝承を持つ。その他、同寺にある薬師堂に安置される仁王像に母が子授の願を掛け、百日間丑の刻参りをしたところ、谷風に怪力が備わった、などという説話もある。

ここで重要なことは、踏石や牛石の伝承の背景に、怪力神授や豊穰／安産／子宝祈願のような、素朴で必ずしも体系的でない形態での民間信仰が見出せることである¹⁹⁾。これは、神仏の代理や顕現としての力人ちからびとに向けられた、人々の原初的な畏敬の延長線上に位置づくと考えられよう。

しかし一方で、祀りの対象は決して仙台の金子与四郎ではなく、江戸で名を上げた谷風であることにも注意する必要がある。逆にいえば、共同体の規制から逃れ、農民身分から脱することができなければ、金子がいかほどの怪力を誇

ろうとも、その存在の神格化は至難だろう。この点で相撲は、身分や場の移動に大きな制限があった江戸時代において、郷里では成し得ない地位上昇が可能となるばかりでなく、制度上の身分とは異なる、格に基づく位階を称号として獲得することができた。むしろこの称号は実用性を伴わず、だからこそ強い象徴的意味を有する。

敷衍すれば、踏石や牛石の逸話自体が、石を持ち上げて怪力を競う、いわゆる力石の変形とも考えられる。そして、全国各地における力石の活発化は、天明(1781—1789)から文化・文政期(1804—1830)の江戸や都市部にかけての力石の流行に端を発している²⁰⁾。こうしてみると、一見して素朴な信仰や土着の習俗の反映にみえる儀式や様式であっても、その原初性がそのまま維持・発露されていたわけではない。金子が江戸で谷風となり、特殊な地位が与えられることで、初めて谷風は郷土の英雄となり、神格化される資格を得た。そしてこの谷風に、民衆は生活に端を発する素朴でプリミティヴな願いを託したのではないだろうか。

Ⅲ. 江戸における相撲と谷風 / 仙台の力士

1. 江戸町民と谷風

谷風は、明和6(1769)年の4月場所に看板大関として付け出された。看板力士とは、興行に際して人寄せをする呼び物として、あるいは大物力士が不在の際に土俵入りのみを行う力士であり、いわば相撲の爛熟期に確立された相撲風俗の一端である。もっとも、異形 / 畸形の身体の見世物化自体はむしろ江戸時代以前からあった。看板力士としての谷風も人気があったようであり、それは当時随一の看板力士だった小兵力士(現在における小人症と思われる)の大童山文五郎と並んでの浮世絵が幾枚も作成されていることにも見出せる。

明和7(1770)年11月場所に、改めて前頭筆頭に付け出された達ヶ関は、7勝1敗の成績を得て、翌年に関脇に上った。安永4(1775)年には、郷土の英雄である初代谷風の名を継ぎ、

同10(1781)年に大関に昇進している。寛政元(1789)年には横綱を免許され、その後寛政7年に現役のまま死去するまで、258勝14敗16分、預かり16、無勝負5、の通算成績を残した。この点で、勝率9割4分9厘という数字は相撲史上においても未曾有であり、また63連勝の記録は昭和13(1938)年5月場所で双葉山が更新するまで破られていない。なお2013年現在、「谷風」のしこ名は止め名になっている。

ところで谷風が活躍した時期は、上方の武士や豪商を中軸に発展した元禄文化から、江戸庶民を担い手とする化政文化への移行期にあたる。そして、この中間期に開花した宝暦・天明文化は、江戸の豪商や上層町民自らが文化の担い手としての自覚を持ち、また反骨精神や反権力志向、いきに象徴される江戸っ子意識の目覚めとともに、洒落本、川柳、浮世絵、狂歌などの独特な文化を誕生、発展させた点に特徴を持つ²¹⁾。江馬務や今和次郎の理解を援用すれば、こうした文化の担い手は、社会の上層で作成された「上から」の流行を受容するだけでなく、積極的に「下から」流行を創出する社会的存在だったといえよう²²⁾。

換言すれば、たとえ幕府による官許のもとで相撲興行の独占が達成されたといえども、相撲に意味を付与し、自らの文脈に引き付けて解釈できるだけの価値創造的な契機を江戸の町民は有していた。木版を使用することで廉価に抑えつつ、かつ多色刷りの技法の進歩に伴い極彩色を纏った浮世絵は錦絵とも呼ばれ、当時の町民にも広く人気を博したが、そのモデルに力士が頻繁に用いられたこと、あるいは社会風刺を旨とする狂歌の主題にたびたび相撲が選ばれたことは、この点をよく示していよう。

一方で江戸町民の自意識の強化は、中央 - 地方を序列的に捉える眼差しにも繋がり、地方の文化を野暮とみる風潮をも生み出した。しかし、翻って谷風をみれば、谷風は地方の力士としてではなく、むしろ江戸相撲のひとつの象徴として江戸町民から絶大な支持を得ている。こうした人気の背景には、谷風自身の力量や人格の反映もあるだろうが、むしろ谷風を町民自らの解釈裡に取り込むことで、いわば谷風を江戸

化したことが支持の主要因と考えられる。それは、谷風を錦絵や落語の主人公に仕立て、かつ江戸っ子が喜ぶ男ぶりや器量の体現者としての役割を与える、あるいは野暮になりかねない怪力を新奇で面白い芸へとカリカチュアライズされることに端的に表れている。

そしてこうしたプロセスを通じてこそ、仙台出身の怪童・金子与四郎は、江戸／相撲を代表する力士・谷風梶之助へと変貌したのではないだろうか。

2. 相撲の政治性

上覧相撲の開催に至る経緯、また吉田善左衛門の登用に至る経緯は複雑だが、ごく簡単に述べれば、幕府側の要望というよりはむしろ、江戸の勧進相撲を取り仕切る相撲会所の強い要請に基づくものとして考えられる²³⁾。しかし幕府の支配体制から逃れた無頼や渡世の輩による相撲興行や、あるいは民衆による相次ぐ辻相撲を排除することができた点で、江戸相撲の公認は幕府にとっても有益だった。この点で、幕府の後ろ盾をもとに、安定した興行形態や生計手段の保証や社会的地位の確保を得ることで、たびたび賤民として差別的な扱いを受けてきた芸能民からの脱却を図ろうとする相撲集団の思惑と、ある意味で定住を可能とする相撲興行の場を認可した幕府の思惑は合致しよう。

加えて相撲は、幕府だけでなく、各藩の留守居による接待や非公式の会合の場としての政治的機能も有していた²⁴⁾。留守居とは、藩主が江戸藩邸に不在の際における藩邸の管理や守護、幕府および他藩の動静把握や調整・取次などを主たる業務とする役職であるが、機密情報に携わるといった職務の都合上から、あるいはそれを名目として、遊郭や料亭などの歓楽施設を頻繁に利用していた。相撲もこうした場のひとつだったわけである。

しかし留守居にとって相撲は、遊郭や料亭と比して、やや異なる機能が期待された。それは第1に、武芸観覧を名目にすることで、妓楼とは異なり、人目を憚らずに会合を行えることであり、第2に、力士が諸藩の威信を背負って取組むことで、諸藩の代理闘争、また諸藩の象徴

的な力を披露する場としての機能だった。従って留守居は、相撲興行を検分し、将来性が認められた力士を藩に抱える役割も担い、藩の名誉が掛かるときには、裏金によって番付や勝敗を操作する、あるいは興行を妨害することすらあったようである。

このように、幕府による相撲を介した社会統制、そして藩閥政治における政争の手段として、相撲は強い政治性を有していた。そして、ここで興味深いのは、相撲と政治の関係が緊密化するまでの一連のプロセス、即ち吉田司家による相撲故実を介した江戸相撲への関与から、横綱位という権威の創出と授与、そして上覧相撲による公的権威の獲得のいずれにも、仙台出身の力士や行事が深く関与していることである。

この点で、初代谷風や丸山は言うに及ばず、当時江戸相撲で立行事の地位にあった木村庄之助も、刈田郡白石出身の元力士だった²⁵⁾。また上覧相撲に際しては、谷風だけでなく、8代藩主斉村の鼻肩を受けた宮城野錦之助や、谷風の実弟である達ヶ関森右衛門が幕内で付け出され、3者揃って勝利を収めたのみならず、御前での横綱土俵入り（手数入）に際しては、宮城野が太刀持、達ヶ関が露払を務め、谷風は7代重村から拝領された化粧回しを着用している²⁶⁾。

この点について、やや想像を逞しくすれば、仙台藩が相撲の政治性を高めることで、自藩の政治的発言力の向上を図ったとも考えられる²⁷⁾。ただし、たとえばしこ名や化粧回しの贈与その他を介して、谷風の背後に仙台藩が透けて見えるような意匠を凝らす一方で、あくまで仙台藩は彼を召抱えず、片倉家の抱えに留めた。また、吉田司家は熊本細川氏、初代谷風は讃岐松平家の抱えである。こうした間接的な相撲への関与は、相撲の自律性や中立性を演出する、あるいは谷風らが失態を演じた際に被る負の影響を最小限に留める思惑の反映だったのかもしれない²⁸⁾。

IV. おわりに

本稿では、相撲の文化還流が織りなす中央—

地方の相互作用について検討してきた。その要点は以下の通りである。

第1に、仙台藩は多数の力士を江戸に送り込み、また江戸相撲の様式に基づく相撲を自藩で開催することで、中央の文化を積極的に受容した。ただし受容に際しては現地の文脈に即した一定の改変もみられる。

第2に、谷風を題材とする地方の習俗や民間信仰と、江戸という中央で育まれた文化やそこで与えられた意味との結びつきを明らかにした。この点に、一見して素朴で原初的な習俗や信仰における、外部（中央）からの文化的影響が見出せる。

第3に、江戸町民による谷風、およびその身体や能力・技量への意味付与を通じて、仙台出身の谷風は江戸の風俗を反映した相撲の象徴となり得た。その意味で、江戸相撲もまたそれ自体で文化的に完結するのではなく、外部（地方）からの影響を解釈することで活性化された。

第4に、幕藩体制における相撲の政治的役割を論じた。幕府にとって相撲の公認は社会の安寧秩序の点で有益であり、諸藩にとって相撲は非公式の会合の場として機能した。また、その際に仙台出身の力士や行事が少なからぬ役割を果たした。

相撲は、公的な権威のもとで秩序化される一方で、その内部や周辺では日常から逸脱した非日常の世界が構成される場に、つまり「管理されてはいるが侵襲的な間文化的境界」²⁹⁾に位置づくだろう。この点で、相撲の文化的アイデンティティを地政学的、本質主義的に固定化する契機と、それを再解釈し新たな機能を付与する契機とが、基盤や位相の異なる多様な主体や思惑の複雑な編み合わせの裡に、同時多発的に生じている。

今後、上述の複数の契機をより精緻に考察するうえでは、力士自身のアイデンティティを読み解く作業が必須だろう。「特異」な身体を利用した格闘を見世物とする点で特殊な技芸を有する職能集団が演じる非日常的な見世物である以上、社会/身体的逸脱者をその内部に抱え、殊更にその異形性を強調することでしか、相撲は成立し得ない。しかし一方で、特定の条件や限

界はあれども、武士的な振る舞いや所作、あるいはときに身分すらが力士には許された。こうした芸能民/武士というアイデンティティの両義性もまた、文化の相互作用の一端として読み解く必要がある。この点で仙台藩には、相撲を武芸の一環としてみる風潮があったようであり、また谷風ら一部の力士は十分に列したようだ³⁰⁾。こうした地方で得た経験や意識が中央にどのように移入され、いかなる影響を与えたのか、もって今後の課題としたい。

注および参考文献

- 1) 拙稿「杜の都のスポーツ文化史」（「講座仙台学 2012—仙台の歴史と文化—」発表資料）2012年3月25日配布。
- 2) 高津勝「身体競技・祭り・民俗—相撲の地域的展開—」『スポーツ社会学の可能性』創文企画、2008、119頁。
- 3) 永田英明「学都仙台 明治の学生群像—東北大学がなかった頃—」『東北大学史料館紀要』（第3号）東北大学史料館、2008、83-110頁。
- 4) 中房敏朗「スポーツの史跡を訪ねる」（「講座仙台学 2009—仙台のスポーツ—」発表資料）2009年12月26日配布。
- 5) 永田英明「せんだい学生スポーツの黎明」『東北大学史料館紀要』（第6号）東北大学史料館、2011、142-164頁。
- 6) ジェイムズ・クリフォード（毛利嘉孝ら訳）『ルール—20世紀後半の旅と翻訳—』月曜社、2002、12頁。
- 7) 同上。
- 8) 同上書、13頁。
- 9) 新田一郎『相撲の歴史』山川出版社、1994。
- 10) 高津（2008）、118-146頁。同「民衆史としての大相撲」『現代思想』（11月号）青土社、2010、138-155頁。その他。
- 11) 宮城縣史編纂委員会編『宮城縣史 18(医薬・体育)』宮城縣史刊行会、1959、487-545頁。
- 12) 勸進相撲の成立展開過程については、新田(1994)、44-207頁における知見に基づく。また、相撲の歴史を紐解くにあたっては、高津（2008、2010）の他、池田雅雄『土俵今昔—名勝負物語』人物往来社、1967。窪寺紘一『日本相撲大鑑』新人物往来社、1992。酒井忠正『相撲随筆』ベースボール・

- マガジン社, 1995. 島根県立古代出雲歴史博物館編『どすこい!—出雲と相撲—』ハーベスト出版, 2009. 和歌森太郎『相撲今むかし』星雲社, 2003. からも示唆を得た.
- 13) 吉田司家と江戸相撲の関係については, 新田 (1994), 235-261 頁における知見に基づく.
 - 14) 主たる論考としては, 本稿で扱った新田や高津の他, リー・トンプソン「相撲の歴史を捉え直す」『現代思想』(11月号) 青土社, 2010, 224 頁. 池田雅雄『相撲の歴史』平凡社新書, 1977, 96-97 頁. 高埜利彦「幕藩体制における家職と権威」『日本の社会史』(第3巻) 岩波書店, 1987, 253-257 頁. などが挙げられる.
 - 15) 江戸相撲の特徴については, 高津 (2008), 124-125 頁, および同 (2010), 142 頁. における知見に基づく.
 - 16) 仙台藩と相撲については, 宮城縣史編纂委員会編 (1959) における知見に基づく.
 - 17) 谷風の生涯に関しては, 同上書, 501-509 頁. のほか, 農山漁村文化協会編『江戸時代人づくり風土記④ ふるさとの人と知恵—宮城—』参歩企画, 1994, 296-302 頁. からも示唆を得た.
 - 18) 農山漁村文化協会編 (1994), 296 頁.
 - 19) 民間信仰と相撲の関係については, 高津 (2010) において, 山形県 (庄内藩) を事例に論じられている.
 - 20) 伊藤明「力石について」『上智大学体育紀要』(第1号) 上智大学体育学部, 1967, 1-4 頁.
 - 21) いきについては, 九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』岩波文庫, 1979 (1930). その他を参照した.
 - 22) 江馬務『新装江間務著作集 日本の風俗文化 第3巻』中央公論社, 2002. 今和次郎・江馬務『文化服装講座 服装史編』文化服装学院出版局, 1930. 今和次郎「流行の文化史」『今和次郎集9 造形編』ドメス出版, 1972.
 - 23) 木梨雅子「寛政の上覧相撲」(1791年)の開催経緯について—19代目吉田善右衛門の登用を巡って—『体育学研究』(43号) 日本体育学会, 1998, 234-244 頁.
 - 24) 新田 (1994), 頁. および宮本徳蔵『力士漂泊—相撲のアルケオロジー—』小沢書店, 1985, 95-98 頁.
 - 25) 宮城縣史編纂委員会編 (1959), 499 頁.
 - 26) 同上書, 506 頁.
 - 27) この点で宮本は, 政治手段としての相撲の構築を仙台藩と熊本藩による合作とみる (宮本 (1985), 99 頁). 幕府権力の中枢に侵入すること
- が極めて困難だった両外様藩にとって, 両藩の相撲資源を活用することで, いわば文化と政治の接続を介した間接的な政治権力の維持向上を画策した, というのがその論旨である. 講座に際して筆者はこの論を援用したが, 仙台藩はともかく熊本藩が江戸相撲に直接的な影響を及ぼした根拠に乏しいと再考したため, 本稿では注に表記するに留めた. なお, 多数の行司流派があるなかで, 熊本藩抱えの吉田司家が見出された決定的な理由は管見の限り不明である. 従って次の見解は全くの推察だが, 熊本藩の第5代藩主・細川宗孝が城中で斬り付けられ死亡した際に, 熊本藩を無嗣断絶の危機から救ったのが仙台藩主の伊達宗村であり, その縁や恩が仙台の相撲と熊本の行事を結びつけたいち要因としてあるのかもしれない.
- 28) 宮城縣史編纂委員会編 (1959), 491 頁.
 - 29) クリフォード (2002), 17 頁.
 - 30) 谷風や丸山らは, その内実は不明ではあるが, 片倉家の徒組として士分に列した (宮城縣史編纂委員会編 (1959), 492 頁). また谷風に限れば, 上覧相撲の事後, 子孫末代までの名字帯刀と絹布着用の許可を得ている (同上書, 508 頁). さらに, 谷風とはほぼ同時代人の経世家, 林子平 (元文3/1738年—寛政5/1793年) は「相撲をば古は武備の一つとなるに仕りたる事にて, (中略) 総て昔の武士は組討の為などに相撲を取候事にて御座候, (中略), 総て男たる者は相撲を取候様に可被仰付候, 相撲は捕手柔術などより一きわまさりたる物に御座候」(同上書, 541 頁) などと論じている.

(2013年5月31日受付)
(2013年7月29日受理)